

氏名（本籍）	丁 颯颯（中国）
学位の種類	博士（国際文化学）
学位記番号	甲 国第12号
学位授与年月日	令和3年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
論文題目	中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞との対照研究
論文審査委員	主査 戦 慶勝 教授 博士（国際文化学）鹿児島国際大学 副査 飯田 伸二 教授 博士（文学）パリ第3大学 副査 外薗 幸一 鹿児島国際大学名誉教授 博士（文学）九州大学

内容の要旨

丁颯颯氏は2015年7月大連外国語大学修士課程を修了し、2015年9月鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程に入学した。大連外国語大学修士課程のときからずっと日本語の可能表現と中国語の可能表現の対照研究に取り組んでいるが、本学大学院の博士後期課程に入学した後、研究範囲を絞り、研究テーマを『中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞との対照研究』に決めた。

本論文はこれまでの研究を精査し高度の対照言語学知識に基づいて独創的な見解を示している。鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程に在学中、査読付き論文2篇、研究ノート1篇を公表し、数回の学会報告を行っている。今回提出した博士学位申請論文はそれまでの研究業績を踏まえて作成したものである。提出された本審査論文の総ページ数は208ページにのぼり、課程博士請求論文の下限を大幅に超えている。

中国語における「可能補語」は動詞と補語の間に“得”や“不”のような形態素を挿入することによって形成された構造のことである。例えば、“干得来”“干不来”のような「V+“得”/“不”+“来”」構造や、“干得了”“干不了”のような「V+“得”/“不”+“了”」構造が可能の意味を表すものである。一方、日本語の複合動詞において、後置動詞の意味によって可能の意味を表す複合動詞がある。例えば、「起こり得る」「起き得ない」のような「V+得る」構造が可能を表す複合動詞にはほかならない。

意味・機能の観点からみれば、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」と「V+“得”/“不”+“了”」のような構造も、日本語の「V+得る」のような構造も可能の意味を表すことができる。この点において、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞には、共通性が見られる。

しかし、共通点ばかりではない。例えば、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造は、可能の意味を表すほか、“回得来”のように単純に移動の意味を表す意味・用法を持

っている。また、「V+“得”/“不”+“了”」構造も“吃得了”のように、可能の意味を表すと同時に完了の意味を表す場合もある。このように、中国語の可能補語に関する解釈が多岐にわたっているのに対して、日本語の「V+得る」は可能を表す意味・機能と可能性を表す意味・機能しか持っていない。そのような事実を踏まえて、本論文は次の三つのことを研究の目的としている。

- I. 中国語の可能補語はどのような枠組みを有しているか。「V+“得”/“不”+“来”」構造と「V+“得”/“不”+“了”」構造はどんな意味・用法を有しているのか。
- II. 日本語の可能を表す複合動詞はどのような枠組みを有しているか。「V+得る」構造はどんな意味・用法を有しているのか。
- III. 中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造と日本語の「V+得る」構造はどのように共通し、どのように食い違っているのか。

上記の三つの問題を解明することがこの論文の目指すところである。その意味で言えば、研究の目的が明確である。この論文は序章と終章を含めて10章からなっている。第1章から第5章までは、中国語の可能補語の分布状況を明らかにし、それぞれのマーカの意味・用法について検証した。第6章と第7章では、日本語の「V+得る」構造に焦点を絞り、前置動詞が意志動詞であるか無意志動詞であるかという角度から論述を展開させている。そのような着眼点は説得力があると思われる。第8章では、第1章から第7章までの分析結果を踏まえて、対照言語学の観点から中国語の可能補語と日本語の「V+得る」構造の類似点や相違点を明らかにした。終章では本論文の意義について述べている。

本論文では、第1章から第7章までの議論で、中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞「V+得る」について、中国語学の立場、日本語学の立場からそれぞれの統語的特徴、意味的特徴を記述し、その一端を明らかにした。第1章～第7章の中国語学的意義及び日本語学的意義は次のようにまとめられる。

- I. 「V+“得”/“不”+“来”」構造における前置動詞が意志動詞である場合、「ある動作が実現できるかどうか」という意味を表す。前置動詞が無意志動詞である場合、「ある現象が現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。一方、前置動詞が意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vできるかどうか」という意味を表し、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+“得”/“不”+“了”」構造は「Vが現れる可能性があるかどうか」という意味を表す。
- II. 日本語の「V+得る」構造の意味特徴は副助詞の生起とも密接に関係している。前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は「あのもの(手段、人、物)なら可能である」という意味を表す。しかし、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得る」は、「ある状況では、VPが起こる可能性がある」という意味を表す。

このような個別言語に関する研究の結果を踏まえ、第8章では、対照研究の観点から中国語の可能補語の意味・用法と日本語の可能を表す複合動詞の意味・用法について対照分析を行った。

中国語の可能補語と日本語の可能を表す「V+得る」構造は使用頻度の高い表現として認められる。中国語母語話者がどのように中国語の可能補語を使っているかということは、どのように可能補語の意味・用法を認識しているかということを反映している。これと同じように、日本語母語話者がどのように日本語の可能を表す複合動詞を使っているかということは、どのようにその意味・用法を認識しているかということを反映している。本論文の第8章において、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」構造、「V+“得”/“不”+“了”」構造と日本語の「V+得る」という複合動詞の統語的特徴、意味的特徴を対照分析の対象とした。第8章の対照言語学的意義をまとめると、次のようになるだろう。

Ⅲ. 前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」は、「だけが」「のみが」で主語を示す文に生起する場合、仮説条件文に生起する場合、「～かどうか」「～か否か」と疑問節を構成する場合、中国語の「V+“得”+“来”」「V+“得”+“了”」構造と対応する。また、前置動詞が意志動詞である場合の「V+得ない」構造は、中国語の「V+“不”+“来”」構造とも「V+“不”+“了”」構造とも対応する。

Ⅳ. 前置動詞が意志動詞である場合の「V+得る」が疑問文に生起する場合、「行く」という動詞が「V+得ない」構造の前置動詞に立つ場合において、「V+得ない」構造は、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と対応するが、「V+“得”/“不”+“来”」構造とは対応しない。さらに、中国語の「V+“得”/“不”+“了”」構造と「V+“得”/“不”+“来”」構造は、前置動詞が無意志動詞である場合の「V+得ない」構造と対応しない。

このような結論は、第二言語教育の現場において、どんな場合にどんなマーカーが使える、どんなマーカーが使えないかという誤用の問題をある程度解消する効果があるように思われる。そのため、このような研究は言語学的意義のみならず、言語教育学の意義もあるといえる。

審査結果の要旨

(1) 研究テーマの適切性

学位申請者は入学して以来、必要な科目を履修し適切な研究指導を受けている。在学中、積極的学会で発表したり投稿したりして高度の日本語学知識、中国語学知識及び対照言語学知識に基づいて独創的な研究成果を出している。

中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞に関する対照研究の例はまだないようである。その意味で言えば、研究テーマの選定が説得性をもち、中国語学的意義、日本語学的意義、対照言語学的意義のあるものとして認められる。

(2) 研究方法の適切性

検証の精度を高めるためにはコーパスの観察が必要不可欠である。当研究はコーパス分析に基づいて考察し、国際文化学の一翼を担う第二言語習得研究の成果として評価することができる。中国語の可能補語と日本語の可能を表す複合動詞の意味・用法を中国語学の視点、日本語学の視点から分析し、そのような個別研究の結果を踏まえて対照分析を行うという研究手法は評価に値する。日本語の可能を表す複合動詞に関する見解の適切さ、中国語の可能補語に関する見解の適切さ、および対照研究能力が採録された2篇の査読付き論文と1篇の研究ノートによって裏付けられる。本論文は高度な日本語表現力によって支えており、目次、章節建て、引用、注釈等についての体裁が整っている。

(3) 結論

この論文はこれまでの研究を一步前進させたものと評価することができる。論旨の進め方が一貫しており、設定した課題に対応した明確かつ独創的な見解が示されている。ただし、中国語の「V+“得”/“不”+“来”」「V+“得”/“不”+“了”」構造と日本語の「V+得る」構造との関連は第二言語習得者にどのような影響を与える可能性があるについては、ほとんど考察がなされていない。それらを含めた総合的な検討が今後の課題として期待している。

テーマの設定が適切であり、論旨の進め方が一貫している。自分の提出した仮説に対して具体的な用例を踏まえてその妥当性を証明し、明確かつ独創的な結論が提示されている。本論文の独創的な研究成果は対照言語学のみならず、第二言語習得にも寄与するものである。結論として学外審査委員を含む論文審査委員会は学位申請者が「研究者としての自立性」と「専門研究の独創性」等の条件を満たしており、博士(国際文化学)の学位を授与することが適当だと判断している。